

熱海

沢庵和尚作

前

ワキ 旅僧

シテ 樵の翁

後

ワキ 前に同じ

シテ 医王善逝

地は 伊豆

季は 夏

ワキ詞

「是は東国行脚の僧にて候。我此程は三島の明神に
参籠申し。又是より伊豆権現を拝み申さんため。
只今御山へと心ざして候。

道行

「東雲の。空も明くるや箱根山。く。伊豆の御崎
は遙々と。雲に連なるわたづみの。そこしもな
きながめして。尾越え嶺越え行く程に。松一むら
に打ち煙る。磯山里に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に。磯山里に着きて候。暫く休らひ里

の名をも尋ねばやと思ひ候。

シテ

「誰こゝに久米のさら山さらくに。浮世の品は何
事も。耳無山に年を経て。頭の雪や眉の霜。消ゆ
る命を限りとて。妻木採るにぞ身は苦し。

下歌

「かくて夕陽影うつる。家路の方に急がん。

上歌

「磯波も。帰れと鳴くや時鳥。く。折知り顔に音
づれて。一村雨の遠近に。振るも音する篤分けて。
着馴衣露しげく。朽ちまさりぬる袂かな。く。

ワキ「如何に是なる老人に尋ね申すべき事の候。

シテ「こなたの事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ「是は東国行脚の僧にて候ふが。伊豆権現へ参詣申さんために。是まで参りて候。さてこゝをば何くと申し候ふぞ。

シテ「是は当国熱海と申す処なり。此里に昔より奇特の御座候。凡そ出湯の名所数々なれども。此里には□□□の天地の呼吸に応じ夜昼四度の満干には。

塩の出湯の涌く事熱鉄をわかす鑪鞴の音。又波濤の岸を崩すにひとし。此湯を汲みて家々に。朝夕浴める諸人は。病ふは消えて霜露の如し。

カヽル「げにや温泉の流るゝ処冬の草青しと。ましてや今は深緑。草木が上にも此里に。心を添へて見給へとよ。

ワキ「さてく聞けば不思議やな。その唐帝の古へ。驪山宮の古事を。

シテ「思へば遠き人の国。

ワキ「我国々の名所や。猪名野を分けて有馬山。

シテ「それは津の国。是は又。

ワキ「難波ならねど蘆刈の湯。

シテ「吠え出づる物か犬飼の御湯。

ワキ「入ればしるしを陸奥や。名取の御湯と聞くは如何に。

シテ「汲むとも尽きじ七久里の湯。

ワキ「猶もあるらん又いづこ。

シテ「但馬の出湯浴むとて。

ワキ「二見の浦を通りしも。

シテ「明けてはくやし水の江の。

ワキ「翁さびしき。

シテ「里なれど。

地「処は伊豆の国。病ふの熱海たのもしや。衆病悉除と説き給ふ。仏の国も遠からず。こゝぞさながら

東方の。瑠璃の世界もよそならず。天も影移る。
誓ひの海の底ふかき。潤は尽きじ見給へや。月も
嶺にさし昇る。はや夕汐の出湯かな。く。

ロンギ地

「さて面白の浦々や。是に見えたる島山は。如何な
る処なるらん。

シテ

「見給へ是ぞ世々の人。ながめは経れど見るたびに。
珍しければいつまでも。名は新島と申すなり。

地

「遥かのよそにほのぐと。流れて遠き島あり。

シテ

「あれこそ箱根路を。我越えくれば伊豆の海。沖の
小島とながめしを。処の者は引きかへて。大島と
申し候ふよ。

地

「思ひ合はする島々は。神代の昔神たちの。生み始
め給ふ淡路島。

シテ

「八島の外も数そひて。おのころ島や百島。

地

「千島にあたら花や散る。

シテ

「蝦夷には見せじ秋の月。

地「猶もあたりの浦山。委しく教へ給へや。

シテ「武士の。八十字治川にあらねども。簞はそれか氷魚寄する。網代の港あれぞとよ。

地「猶入海の奥ゆかし。小舟さし入る苦屋形。

シテ「身を仇波と打ち捨てゝ。世を伊東が館とはあれなり。

地「青みて遠き山つゞき。

シテ「河津俣野が其むかし。

地「相撲の勝負争ひて。紅葉を顔に散らしゝ。赤沢山

の夕づく日。忘れたり方々。御山へ急がせ給ふらん。語ると尽きじ此尉が。繰言もよしなしと。

もと来し道に行くと見えて。後影も失せにけりや。

うしろかげも失せにけり。(中入)

地「実に信あれば徳ありと。く。疑ふべきや疑は

じ。暫くこゝに祈誓して。神の奇特を待ちて見ん。く。

後ジテ

「我此名号一經其耳。衆病悉除身心安樂。神といひ
仏といひ。只これ水波の隔てぞかし。」

詞

「我此里に跡を垂れて。所を守り民を撫づる。」

カ、ル

「もとより東方淨瑠璃世界の主。医王善逝我なり。」

我此名号を一度耳にふれん者は。当代無病の人と
なり。身心ともに安樂ならしめんとなり。たゞ頼
め。
(舞)

地

「只たのめ。く。しめぢが原のさしも草。」

シテ

「くゆるは者か。衆生の苦患に変はる身の。」

地

「胸の猛火に。夜昼四度の塩の出湯。」

シテ

「万の悩みに注ぎそゝげば。」

地

「病即消滅不老不死。業障も尽き忽ちに。衆罪も

消えて煩惱の雲晴れ。真如の月も。心の空に曇り
なく。夜昼分かぬ光を放ち。夜昼分かぬ光を放つ。
恵日の影ぞ有難き。」

